

CDCのフィールド疫学マニュアル

監訳：岩田 健太郎

COVID-19流行に曝された今こそ、 すべての医療・公衆衛生関係者に！

発売直後から SNS 上で話題になっていた『CDC のフィールド疫学マニュアル』。大変興味深く、これは是非購入して読もうと思っていたところに、書評の依頼をいただきました。監訳は岩田健太郎先生。おそらく私と同世代の医師であれば、学生時代・研修医時代と、感染症の勉強に、岩田先生のこれまでの著書には大変お世話になった人が多いのではないのでしょうか。

訳者のなかには坂本史衣先生のお名前も。坂本先生には、初期研修・内科後期研修で勤めていた聖路加国際病院で一緒にしました。当時から、感染症対策を徹底している病院だと感じていましたが、昨年からの新型コロナウイルス感染症（以下 COVID-19）で、さまざまな媒体で発信する坂本先生のお姿を拝見するにつけ、改めて感染症対策を学ぶのに非常に恵まれた環境であったことを感じています。

さて、このような高い期待とともに本書を繰り始めたわけですが、読み進めるにつけ、公衆衛生に携わるすべての関係者に、是非この書籍を読んでもらいたいとの思いを強くしました。2019 年末から、COVID-19 の世界的

な流行が始まりました。未知の感染症に対して、その特性を突き止め有効な対策を打ち出してきた世界中の英知に対しては、ただただ尊敬の念を抱くとともに、ここ日本でもいわゆる「クラスター」「3密」などの言葉に代表されるような COVID-19 の特性を、感染流行のごく初期に突き止めた実績は素晴らしいと感じています。このような COVID-19 の特性を明らかにすることを可能とするものが「フィールド疫学」であり、今ほどその重要性が世界中で認識されている時代もないように思います。

本書は、フィールド疫学の定義に始まり、具体的にどのように調査を進めるのか、その理論の枠組みや科学的にとるべき手順について、丁寧に解説がなされています。さらに、実務上の問題点とその対処方法にまで広く言及されています。フィールド疫学の特性上、綺麗に用意・計画された研究のように物事は進まず、昨今の日本の対策の状況を見ても明かなように、不確実ななかで調査・研究を進めなければなりません。政治との調整、報道のあり方、リスクコミュニケーションな

どもそのなかに含まれてきますが、そうした実務の重要さも、要所要所で解説されています。

さらに、この本をより読みやすくしている点として、具体的事例が豊富に掲載されていることが挙げられると思います。主に米国で発生した事例を中心に、具体的なシチュエーションや数値が数多く示されていることで、よりわかりやすく、また臨場感をもってフィールド疫学の実感を体感できます。

2021 年 2 月現在、COVID-19 はいまだ収束の兆しは見せていません。この世界的な大流行のなかで、多くの医療・公衆衛生関係者が何かしらの形で COVID-19 にかかわっていると思います。本書は、保健所などの第一線で疫学調査にかかわる人はもちろん、COVID-19 の診療・対策にかかわるすべての医療・公衆衛生関係者が、その背景情報としてフィールド疫学に関する知識を習得するのに是非お勧めしたいです。

（坂元 晴香）



MEDSi
4,620 円（本体 4,200 円＋税 10%）
B5 変/312 頁
ISBN978-4-8157-3008-6